

平成 30 年 6 月 20 日現在

機関番号：14503

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26381200

研究課題名(和文)「総合的・領域横断的な芸術表現教育」の指導者養成に関する実証的研究

研究課題名(英文)An empirical study on the training of leaders in comprehensive and cross-disciplinary art expression education

研究代表者

初田 隆(hatsuda, takashi)

兵庫教育大学・学校教育研究科・教授

研究者番号：60273819

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では小学校において「総合的・領域横断的な芸術教育」の実践を行うことができる教員の育成を目指した「教員研修プログラム」の開発を行い、その成果を検証するとともに、テキストにまとめることで、教員養成大学・学部教員や指導的立場の小学校教員へと提供し、図画工作科や音楽科の担当者会や校内研修会などで活用されることを企図したものである。初年次より研修プログラムの実施と分析検討を重ね、プログラム構成の手順や展開方法を明らかにするとともに、プログラムを構成する活動単位を作成し、体系的に示すことができた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research was to develop "teacher training program" for training teachers, who will be able to practice "comprehensive and cross-disciplinary art education" at elementary school, to verify the results, and in addition, to summarize as a textbook. They are intended to be provided with elementary school teachers or students who will be a teacher in the future and be utilized as a teaching staff in a training institute or an in-school workshop in visual art department or music department. From the first year on, we had conducted training programs and analyzed them. As a result we were able to clarify procedures of program configuration and development method, further create dynamic units and show them systematically.

研究分野：絵画・美術教育

キーワード：総合的領域横断的な芸術表現 芸術教育 教員研修 感覚横断的な表現

1. 研究開始当初の背景

(1) 現代芸術のフィールドでは、領域横断的な表現が様々に展開されており、旧来の芸術のありかたへの再考が迫られている。また、子どもたちの感性や情操をはぐくむうえでも、諸感覚を統合的に働かせ表現する活動が有効であると考えられる。そこで、現代芸術の総合性に対応するとともに、総合的な芸術教育の実践を行うことができる教員の養成が、今後ますます必要になってくると思われる。

「音を描く」といった、美術と音楽との領域横断的な学習についての実践や研究は、これまで多数行われてきているが、現在、思いのほか教育現場には浸透していない。多くの教員は、音をかくといった学習に対する意義や可能性は認めつつも、そのような教材内容(活動例)や指導方法を知らなかったり、実際に経験したことがなかったためである。小中学校における芸術教科の総合芸術教育のあり方に関しては、既に1995年に野波も教育現場にアンケート調査を行っているが、現行の教科では推進できない理由に、教師の資質や経験の不足、教材や資料の不足を挙げ、各教科の内容及び方法の再考と教員養成大学における教育改善が課題であるとしている。そこで、総合的・領域横断的な芸術教育の実践が可能な教員の育成を図るためには、教員養成大学(院)での教育改善(合科的な授業展開、新科目の開講など)、教員を対象とした研修会の実施、総合的・領域横断的な芸術教育のテキスト(理論、指導法、題材例など)の出版などが有効であると考えた。

2. 研究の目的

(1) 本研究では小学校において「総合的・領域横断的な芸術教育」の実践を行うことができる教員の育成を目指した「教員研修プログラム」の開発を行い、その成果を検証するとともに、テキストにまとめることで、教員養成大学・学部教員や指導的立場の小学校教員へと提供し、図画工作科や音楽科の担当者会や校内研修会などで活用されることを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 兵庫教育大学では平成22年度より「総合芸術表現演習」(大学院科目)を開講しているが、今回の研究では、まず、その成果と課題を、受講者の表現力と指導力、内容構成力といった観点から整理したうえで、焦点化された課題に関する調査・実験を行う。例えば、「音を表現した絵」に相応しい評価法の研究、音を絵にする活動を行う際に有効な「声掛け」の研究、などである。それらを踏まえ、短時間で集中的、効果的に研修を行う

ための内容と方法を明確化し、プログラムとしてまとめる。また、プログラムの試行実践終了後、受講生に、それぞれの勤務校で授業実践を行ってもらい、授業記録や児童の作品、アンケートなどから授業分析し、研修プログラムが受講生に及ぼした成果を検証する。以上を踏まえ、研修プログラムの修正を行うとともに、今後の研修会で使用可能な「テキスト」の作成を行う。

本研究の学術的な特色・独創的な点

オルフェメソッドやリトミックなどの研修プログラムはかなり普及されているが、あくまでも音楽主体のものであり学校教育では限定的な取り入れがなされているに過ぎない。本研究では、造形性と音楽性、身体や言語などを総合的・横断的に取り扱ったものであり、小学校での実践を想定して構想するものである。そして本研究は指導者育成に資する実践的・実証的な研究であるが、これまでの大学院での授業実践の分析に基づくものであり、領域横断的な芸術表現の意義や可能性、教育的効果に関する研究(「研究業績」欄に記載)を踏まえたものである点も特色といえる。またプログラムの作成にあたっては、4つの表現領域を仮設したうえで(「美術・音楽をつなぐ」「言語を介して」「身体を介して」「感覚をひろく」)それぞれの領域に応じた表現活動の類型を想定し、続いて表現技法や表現形式などの条件を勘案しながら題材構成を行うものである。このようなプログラム作成の理論や手続きに加え、本研究ではプログラムの終了後、受講者に小学校での授業実践を行ってもらい、授業分析を通してプログラムの有効性を検証するものであるが、これらは本研究の独創的な部分であるといえる。

4. 研究成果

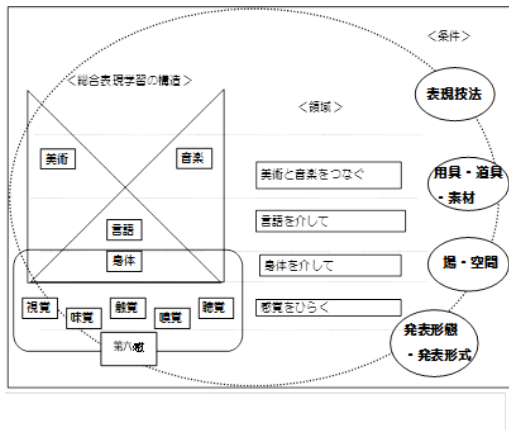
(1) 初年度の研究成果

本年度は、これまで、行ってきた総合芸術表現に関する授業やワークショップの成果と課題を整理するとともに、全国都道府県で行われている教員研修の実態を調査し、プログラム開発の課題と視点を導出した。それらを踏まえ、総合芸術教育教員研修プログラムの内容構成や展開方法などを作成し、教員免許状更新講習において、部分的な試行実践を行った。

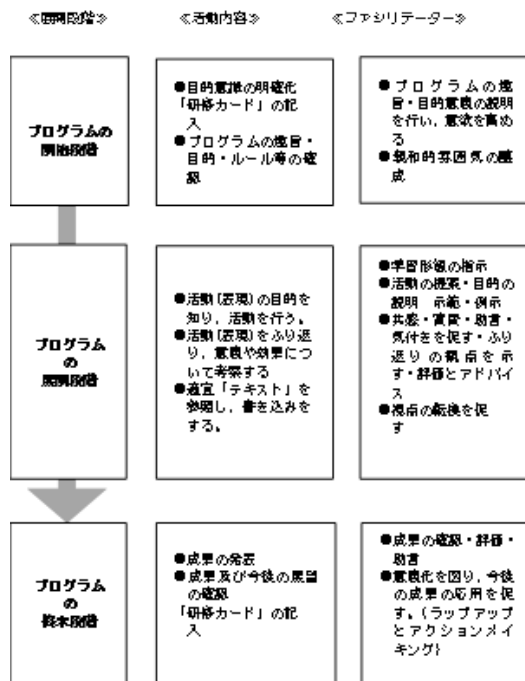
結果、受講者の意識変化も見られ、総合的な芸術教育に関する研修の必要性を再認識するとともに、今後の実践に向けての展望を得ることができた。その成果については、「総合的・領域横断的な芸術教育に関する教員研修プログラムの開発」(美術科教育学会誌『美術教育学』第36号)にまとめ発表した。

尚、活動内容を導出するための構造を以下

に示す。「美術と音楽をつなぐ」「言語を介して」「身体を介して」「感覚をひらく」の4つの領域ごとに「活動類型」及び「基本的な活動」を設定した。「基本的な活動」を具体化するための要素として、「表現技法」、「表現用具」、「学習（表現）形態」を挙げ、それらを結び付けながら具体的な活動とプログラムを作成するという手順である。



プログラムの展開に当たっては、段階毎に活動内容、ファシリテーターの役割を示した。



また、受講者の、参加目的を明確にし、成果を確認するための媒介として「研修カード」の活用が有効ではないかと考えた。カードには受講者のプロフィール、研修への参加目的等を記入することで、自らの参加目的を鮮明化させるとともにファシリテーターが事前に受講者の実態を把握することができる。そして、終末段階には今回の研修内容、目的の達成度合い、研修の成果、次への目標などを記入し、研修の振り返りを行えるよう

にする。また、ペアからの他者評価やファシリテーターからのコメントなどを記入できる欄も設けている。そして、研修カードは次に参加するときにも持参し、書き加えていけるようにすると、継続的・発展的に研修の成果を積み上げていくことができる。

尚、活動形態であるが、通常研修会では受講者相互のインタラクション（コミュニケーション）を通して学びを深めることが重要視されているが、総合表現の研修会においても、互いの気づきをシェアリングしたり、感性を感じ共感しあったり、批評し合うことが表現の質を高め、小学校での授業への応用の視点を得るにもくると考えられる。そこで、ペア活動、グループ活動を適宜組み合わせ、プログラムの構成を行う。

また、研修者が視点を転換させながら、研修の意義を多角的に捉えられるようにすることが重要であると考えた。教える立場・学ぶ立場、表現者の立場・他者の表現を受け止め味わう鑑賞者の立場という軸を設け、それぞれの視点を往還させながら活動を行うよう促す。

個人教員研修カード					
氏名	年齢	教職年数	研修の種類	初任10年希望	校種
園工・音楽の指導経験					
今回の研修目的・目標					
教育現場における自己課題					
研修名		日時		講師	
今回の研修内容					
今日の研修成果 (感じたこと、気づいたこと、変わったこと、新たに得たこと)					
ペアからの他者評価					
次の自己課題					
ファシリテーターからのコメント					
事前	-5 0 5				事後
	-5 0 5				

(2)2・3年目の研究成果

27年3月には、大学院生15名を対象に、3日間（90分を15回）の研修プログラムを試行的に実施した。「出会い」「感覚をひらく」「感覚横断的な表現」「音をつくる」「音楽と美術の統合的な表現」「言語・身体を介在させた表現」といった内容のワークを行い、最後にグループ毎に、総合芸術の教材開発と模擬授業を行った。プレテストとポストテストとして、「音を描く」及び「絵のイメージを演奏する」といった活動と、小学生対象の授業

を行う場合の導入の働きかけを想定して記述するという課題を実施した。そして、「参加目的」「課題の達成度」「受講して学んだこと」「これまでの美術・音楽への好感度」「各ワークの印象」などの記述内容と、プレテスト・ポストテストの結果から、試行実践の分析・考察を行った。

結果、受講者の指導技術や表現技術の向上、そして総合的な芸術教育に関する意識変化等を明らかにすることができた。その成果については、「総合的・領域横断的な芸術教育に関する教員研修プログラムの開発(2)」(美術科教育学会誌『美術教育学』37号)にまとめ発表した。

8月には、現職教員を対象とした研修講座「音楽+図工=?総合的な表現活動を楽しもう」を実施した。総合的な芸術教育に関する基礎的なトレーニングから徐々に内容を深めていけるような活動配列を行い、プログラム末には、グループ毎のパフォーマンス発表と、教材開発及び模擬授業を設定した。また、ペアでの活動、グループ活動などを適宜組み合わせ、受講者相互の交流を活性化させること、活動単位ごとに教育的意義と芸術的意義を示唆することなどを心掛けた。事後アンケートの記述からは以下の成果が確認できた。総合表現活動の楽しさの感受、感覚が開き、表現が深まる実感、コミュニケーションを通じた学び、総合表現の価値や意義の自覚と教育的な視座の獲得、である。

続いて、研修講座の受講者から3名を選び、研修で学んだことをもとに授業を構想・実施してもらい、題材設定の趣旨や授業記録、児童の作品・コメント等から授業分析を行うことで、教員研修が受講者に及ぼした成果の検討を行った。

結果、受講者の個別の課題意識に応じた形で、総合的・領域横断的な芸術教育の意義や価値の共有化が図れたという点で、プログラムの成果を確認することができた。また、研修を通して、「感性や感覚を開く」、「コミュニケーション力の向上」、「表現することの楽しさ・喜び」といった、総合的な芸術教育の意義や効果の自覚、総合的な芸術表現学習の授業づくりや指導方法などの教育的視座の獲得、「芸術」に関する視野の拡張(従来の美術・音楽といった固定的な教科・領域の枠組みを超えた視点からのアプローチ)といった点から受講者の意識変化をとらえることができた。これらの研究成果は「総合的・領域横断的な芸術教育に関する教員研修プログラムの開発(3)」(『美術教育学』第38号)にまとめ発表した。口頭発表としては、第10回「感覚をつないでひらく芸術教育を考える会」で行った。

尚、研修講座「音楽+図工=?総合的な表

現活動を楽しもう」のプログラム内容は以下のとおりである。

テーマ	活動
ガイダンス	個人研修カードに必要事項を記入
出会いのワーク	音のキャッチボール 3人でセッション グループで即興的に絵案書を作って演奏する ペアを作る 手のひらで感じる 他者紹介
感覚を開くトレーニング	積み木を積み ペアで音楽に合わせて2人でドロイングする
感覚横断的な活動を楽しむ	味覚を絵と音で表す
音を感じる・音を作る	聞こえない音を絵で表現する 紙で音をつくる・演奏する 日常品で演奏する
レクチャー	総合芸術表現の意義や可能性、教材化などについてのミニレクチャー
音楽・美術をつなぐ即興表現	名画の音響効果をつくる
音響活動を介した表現	オノマトペアンサンブル
教材開発演習	教材開発を行う
まとめ	研修の振り返り、教員研修カードに記入する

(3) 最終年度の研究

最終年度には、これまでの研究成果を踏まえ、図工科や音楽科の担当者会や校内研修会などで活用可能なテキストを作成した。本テキスト(報告書)は部構成となっており、部ではこれまでの研究成果をまとめた論文7編を採録し、研究の全容が概観できるようにした。部はプログラムを構成する活動を、「1、出会いをつくる」「2、感覚をひらく」「3、音で遊ぶ・絵で遊ぶ」「4、感覚横断的な活動を楽しむ」「5、身体を感じる・動きをつくる」「6、言語活動を介して」「7、音楽・美術をつなぐ表現を楽しむ」の7つの領域に整理して示した。第部で示したプログラム構成やプログラム展開の方法を参考に、いくつかの活動を組み合わせることで、研修の目的に応じたプログラムの構成を行うことができるようになっている。

<引用文献>

初田隆・井上朋子「音を描く活動の研究」『美術教育学』, 34号, 2013, pp.407-418
野波健彦・池上敏・福田隆真「教員養成課程における表現教育と芸術教科の役割」『山口大学教育学部附属教育実践研究紀要』山口大学, (6), 1995, pp.201-208.
5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計3件)

「総合的・領域横断的な芸術教育に関する教員研修プログラムの開発(1)」, 美術科教育学会誌『美術教育学』, 査読有、第36号、

2015、pp.57-70

「総合的・領域横断的な芸術教育に関する
教員研修プログラムの開発(2)」、美術科教育
学会誌『美術教育学』、査読有、第37号、
2016、pp.105-117

「総合的・領域横断的な芸術教育に関する
教員研修プログラムの開発(3)」、美術科教育
学会誌『美術教育学』、査読有、第38号、
2017、pp.381-394

〔図書〕(計2件)

初田隆・木下千代「『総合的・領域横断的
な芸術表現教育』の指導者養成に関する実証
的研究」、時得紀子編『芸術表現教育の授業
づくり』三元社、2017、pp.277-285

初田隆、木下千代、井上朋子、吉本宝文堂、
『“総合的・領域横断的な芸術教育”の指導
者養成に関する実証的研究』2018、154

6. 研究組織

(1) 研究代表者

初田隆 (HATSUDA, Takashi) 兵庫教育大学・
学校教育学研究科・教授
研究者番号：60273819

(2) 研究分担者

木下千代 (KINOSITA, Tiyo) 兵庫教育大学・
学校教育学研究科・教授
研究者番号：70252822
井上朋子 (INOUE, Tomoko)
兵庫大学短期大学部准教授
研究者番号：40636594